

3022  
1

曲亭馬琴翁著編  
歌川國直畫圖  
全部  
八冊

富士  
淺間  
三國一夜物語

東都書林  
文永堂梓

中堂

三國一夜物語序



夫古今來說部書指不勝僂何唯牛棟而已哉其談時事說神怪因事托諷醒蒙昧之耳目其意激矣曲亭先生少負異才結廬于飯台之山麓鍵戶吮毫留心於陰陽冥報之事手鈔不怠著錄數十種既刊布于世嗚呼

人之嗜望無涯。苦海愛河。比比沉沒。孰不恐哉。苟殃可以懲。領邪祥可以。憑吉士。寓風人之旨於。噓笑之中。自警復警。人先生原具一片之。深意。非漫然。以風流文采見長也。其關係於人心世教。豈淺鮮哉。世之閱者。不可置爲冗籍也。

文化二年夏五月上浣

著作堂塾生魁蕾子應先生之命  
題於篔簹軒雨窗





音迹冥目海亦  
 足却東路行山毋鼓毋  
 不二乃修澤



富士太郎知一



浅間左衛門照行

三目卷六十一

三國一夜物語總目次

○嘉慶二年戊辰秋七月より應永元年甲戌春二月に至りて物語をて六年の事に係る。

第壹編 足利義滿公富士を戀して富士を得の事

第貳編 富士右門龜を放つ及商人五四郎の事

第參編 駿河の小雪尾張路の櫻の事

第肆編 古廟の焰消富士右門を焼の事

第伍編 富士太郎森羅殿の舞樂を召るの事

第陸編 淺間照行彌陀寺の法會を詣るの事

第漆編 赤間關の兩妓嫖客をわらふの事

第捌編 三雲鼓を打て雙言人の擬の事

第玖編 妓女節の死して夫あふるの事

第十編 富士太郎孤嶋の仇を殲むの事

○統計十編全部七冊

總目錄畢

題賢婦櫻子

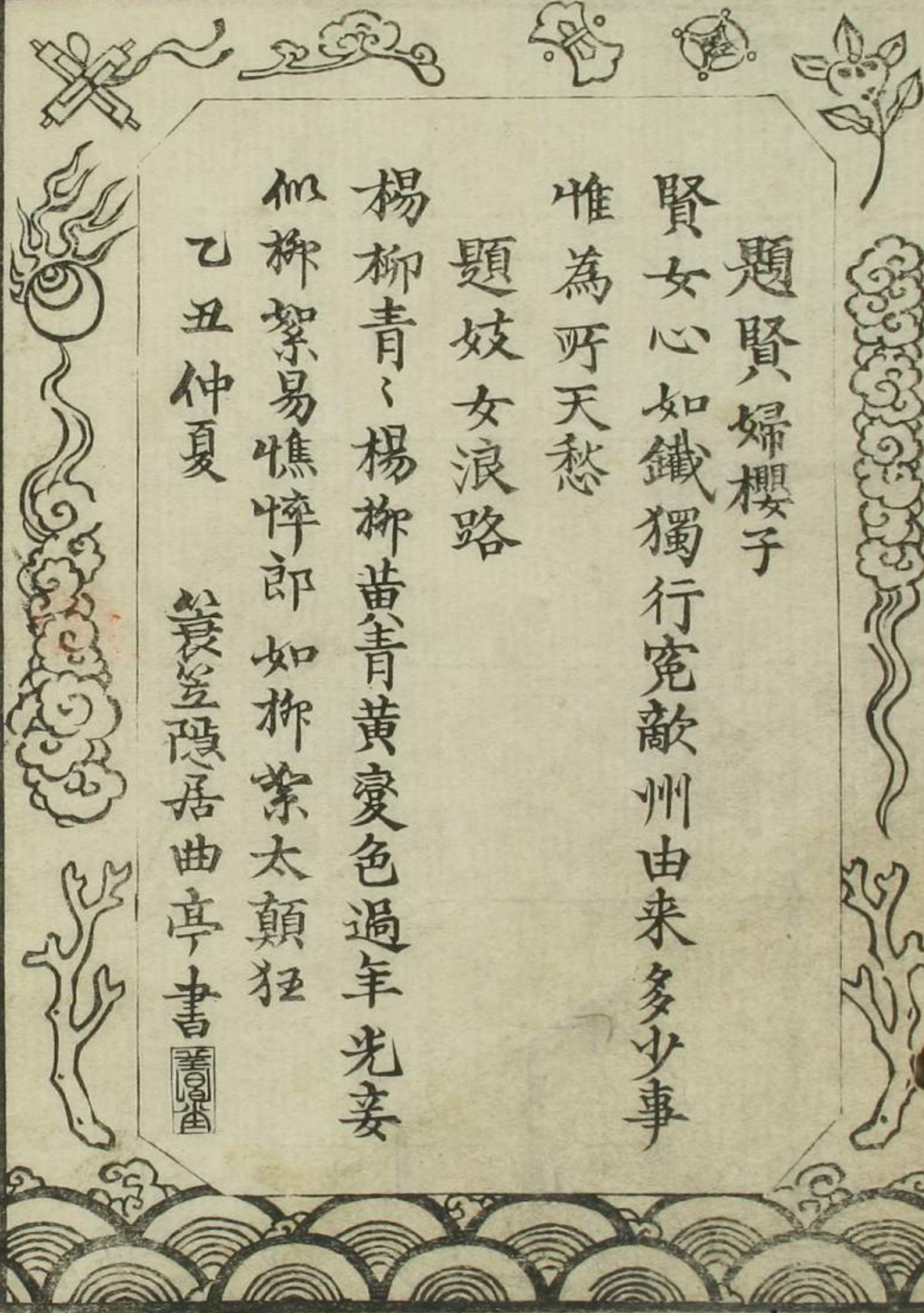
賢女心如鐵獨行寃敵州由来多少事  
唯為呀天愁

題妓女浪路

楊柳青々楊柳黃青黃變色過年光妾  
似柳絮易憔悴即如柳絮太顛狂

乙丑仲夏

簑笠隱居曲亭書



富士 三國一夜物語卷之一

東都 曲亭馬琴著編

第一編

足利義滿公富士を齎して富士を得るまで

元弘建武の擾亂より。蠻觸の争ひ止時ありり。も。數十  
年。小して南帝の聖運傾き。和田楠も山名氏清も。攻ら  
まて。赤坂の城陥りけり。和泉河内をも押奪。加旃紀  
州の合戦。み宮方うち負て一方の大將と頼を奉る。つる。  
橋本治部丞も討まらば。橋本が女兒櫻子。家臣村主  
兵。从婦夫の者。み扶掖。ら。往方も。あ。ぞ。呻吟。出ぬ。さ。ま。ら。  
足利三世の將軍前左大臣源義滿公天下一統の功

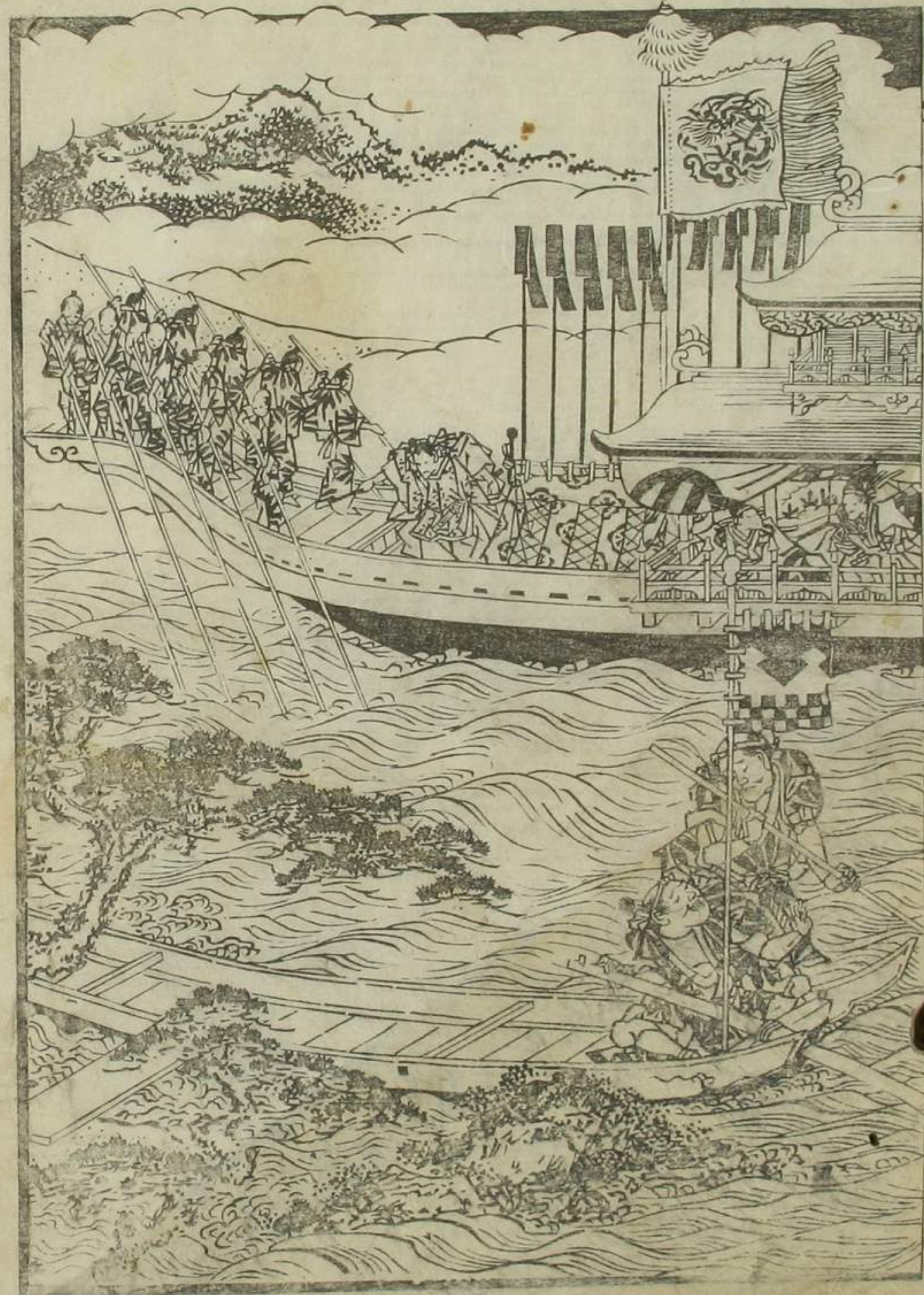
成て軍勢やうやく無支る富士山遊覽あるべき嘉慶  
二年六月上旬既の華洛と幾の御内外様の大小名  
さうり。上達部殿上人居る供奉のひつ。前驅後従の  
武士三千餘騎童扈從數百人青侍雜色走衆に至る  
までかの装束の綺羅と竭。とを晴とを打捨ける斯て  
義満公のまじ紀の浦々と遊歴りて伊勢尾張路を過  
日數徑て駿河の國府に着る。國守今川上總兵泰範  
とを迎てまじ。款待をまつ。四五日のうち濱出の御遊  
ある。朝まじ。促し言せば義満聽て出御りて  
數十艘の樓船と浮べ三穗の海方を艘せの御船の

金銀珠玉とて鳳鳥花草と鏤う錦の幔幕。緩の  
水引風の翻る浪の映。水千舵工のの款乃と發して拍子  
あり。歌ひつ。彼歡樂まら。哀情。賦  
賦うけん。漢帝のひ。勝る心持を頃。秋の  
みして。残暑。折る。吹風衣と融して人。汗を  
忘る雪の富士が峯に降布て四時の壯觀も目前あり。  
る不頭を回して向上の南久能山あり。西の田見清見瀉  
ゆ。三穗の松原磯。駒。松も君が齡の算ま。い。筆  
その数も。塩焼海人の煙き画の写とも筆の  
更ぬ及び。この日も泰範主儲。奉り。勸盃禮義と



正して酒酣より一とき義満眺望の倦むて宜ふや。  
 泰範の貞世入道了俊が甥にして風月の才その聞えり。  
 富士の事實その名所などもいと詳まれば洛の裏の空  
 まかす宜まれば泰範答ヤスや。台命の如く幼きより了  
 俊の従ひて物學びまら。驚才みして文の道は疎けまら。  
 覺悟せしむるなりとども固辞奉るも畏けまら。只その  
 際略とやふべ。抑富士はその山駿河の隸て四州に跨る  
 所謂南西の方へ駿河の屬し北東へ相摸の屬し西北へ  
 甲斐の屬し東南へ伊豆の屬し凡關の八州よりとま  
 と望の山の形何國も異るるなり。その北面の山脚長く

南面へ殊の險阻し甲斐より登るを吉田口といひ駿河より登るを  
 大宮口といひ相摸より登るを嗟走といひ坂路絶頂に至るまで九里  
 餘也直立してとまを算まれば廿四町ありとも雪は六月望の日消て  
 其夜降より古歌み見えては寔に三國第一番の名山蓬  
 萊不死の仙境なり。この山孝靈天皇の五年夏六月と  
 りて見る蓋この年近江の湖水一夜湧出その土をまら  
 富士山と名をるより。世の傳へるごとく萬葉集山部  
 宿禰赤人の歌天地之分時從神左備手高貴寸駿  
 河有布士能高嶺乎天原云とあるを思へば神代よりある  
 山なり。且富士の郡の名を取と本朝文粹み見えて或は



不盡不二とも書又竹取物語の説根きて不死とも書  
歌歌の浅間とも詠て祀ところの神浅間大権現八山  
祇命の女木花開耶姫命より平城天皇大同元年神社を  
山の頂の建役行者ととりて登山一。空海圓珍の両大師許  
多佛像を作りてまをせし。浅間と富士の一名をせ  
信濃の浅間が嶽伊勢の朝熊山あるをもて今ハ浅間と  
声の讀の元和訓めさまと朝隈のくと略せるめて朝日  
影の山の映して殊さらぬ栄わむ。まらら賞美の名るべし。  
浅間も朝熊も字ハ假するのめて。朝隈の義ありとぞ。  
まのなり名斯る不多し。足高山田兒浮嶋が原ハ眼前の見ゆ。

或ハ消こびぬらうらふ人と定家卿のよきゆひ一木枯の森ハ  
倭文機山の向より或ハつりる海と富士川と歌ひけん。  
石花海有渡濱富士の鳴澤偽の橋るど悉くやさんも  
嗚呼がましうこそいへと。辯舌菜の水の流るがどく迷ゆけ  
義満公御感浅うらむ。げふも其許のりるぞ。浅間ハ  
富士の一名るを。信濃の浅間が嶽ゆけあきて今ハ人の  
うら古實ともまらむらぬ。泰範が物ぐるりめて。予も一  
首の趣向を得うらとて。

まのふま富士の高嶺ハ見一雪の  
袖ハもうけを田兒の浦浪

と詠トの久バ恭範も上達部も只管稱讚まわらせり。君  
臣朋友も興トの久折しも初秋のそら定らぬ富士の遠  
雲聳ひろどり。さうも今も晴る天儀頃め結陰で一急  
雨のさき降来るぬぞ。御船と三穂の汀の艘よせあそび  
間をまらぬふ。あて雨止雲あさまうて日も中西の斜あり。  
今の殺風景小興も竭まんときとく舞樂を奏さるる  
命さるる左中辯義資權少將雅青春宮權佐豊光杯  
豫てその伎を嗜める大宮人管絃の帝の臨久へ原天王  
寺の伶人あり。浅間左衛門照行近曾赤松義則の  
就て將軍家の扈從一奉り。此度の供奉も召さるるが。

大鼓の役を候どり。かくて堂下の立部回雪の袖を翻し。  
鉦絃急管の声一唱三嘆の調融洩として正始の音の  
叶ひ簫詔九奏さるる鳳舞魚跳り天衆もとみ来臨し。  
龍神も納受さるる昔三穂の松枝の天女天降  
る。舞樂を奏しけりも。やとおびあそびりぬ。曲も不央を  
り。一時何とまけん浅間が大鼓忽地の音律濁り。調  
あつぐ。乱れし。照行大ぬらあやし。席を去てやまう  
きて伶人秘曲を奏さるるとき音律をあり。つるりの。を竊  
聴べ五音立地の變るるあり。さきと都會の地景京城  
の片邊のあり。ぐる東海の渺く。汀渚の蔽るる盧葦

のゝめて。入住ひ里ま遠け。近き。音律を。あつら  
 の。あつら。も。あが。へ。り。南方の。残業。謀叛の。凶徒。を。あ  
 潜。め。る。君を。窺ひ。奉。る。も。又。あ。る。べ。し。な。ぐ。く。警。固。の。武  
 士。命。を。草。の。叢。中。に。撈。し。め。り。と。や。め。ぬ。近。臣。大。の  
 驚。ま。て。供。船。の。武士。を。召。登。せん。も。間。遠。き。吾。儕。ま。る。と  
 向。て。穿。鑿。ま。し。と。い。ひ。も。あ。ん。ど。快。船。を。打。ち。あ。り。あ。る。び。の  
 板。を。投。り。け。て。既。に。陸。に。登。ら。ん。と。も。活。處。の。い。と。汝。れ。う。榜。の  
 單。衣。を。被。て。腰。に。短。き。刀。を。帶。破。る。竹。笠。を。う。ち。載。て。一  
 條。の。釣。竿。を。持。つ。男。草。の。裡。より。あ。ら。り。出。う。り。ま。は。麻  
 者。ぞ。こ。も。生。拘。ん。と。鬨。バ。彼。男。の。光。景。を。見。て。大。の。怕。は。忙

ち。笠。を。擡。遣。捨。砂。の。上。に。領。巾。伏。て。い。の。中。に。辺。鄙。の。隨。夫。大  
 樹。の。御。遊。と。あ。ら。も。漫。め。ら。あ。り。て。釣。し。う。ら。が。郷。向。の。驟。雨。の。よ  
 っ。て。御。船。と。こ。の。浦。に。よ。せ。り。ひ。し。と。も。て。と。り。め。て。その。事。を。知。ぬ。兵  
 逃。ま。去。ら。ん。と。欲。ま。れ。ど。も。路。を。け。ま。ば。己。こ。と。を。得。ま。彼。首。の。く  
 ろ。ひ。け。り。ぬ。その。罪。輕。ま。あ。ら。ぬ。と。仁。君。今。德。を。布。て。普。く  
 民。を。安。ら。し。め。り。と。安。り。ま。が。て。恩。免。を。蒙。り。な。る。べ。し。元。來。小。人  
 野。心。を。挟。む。者。の。あ。ら。ぬ。と。あ。ら。ぬ。浦。の。鎮。り。ま。も。羽。衣。明。神。も  
 照。覽。の。べ。し。と。い。ひ。訖。り。佩。る。刀。を。と。り。て。海。面。に。投。入。ぬ。義。満。公  
 熟。齋。の。い。の。形。を。賤。の。男。の。言。語。動。靜。由。緒。の。あ。ら。ぬ。と  
 ぞ。く。て。目。今。兵。器。を。遠。ざ。り。て。赤。き。心。を。示。し。う。頭。智。尋

常の田夫野人のあつらひ。音律をとりしるのあやと御  
 参つて。その者より將てあるべしと命されば近臣うけつら  
 聴て快船を誘ひ登り。御座船ちうく引居り義満公則  
 近臣をりて你が為体由緒あるものと見る。匿まざる姓名を告れ  
 質のようて罪をも許べしと命下されければ彼男の  
 小人の菴原川のある。茨村に住る富  
 士右門知之とヤス者めて先祖の住吉の伶人ありしが菴原院  
 花園帝二奉の正和年中内裏の舞樂ありける時祖父富  
 士右京進知親その召の應トししが其頃天王寺の伶  
 人浅間照蔭ハ正しき富士が従弟めて攝政冬平公へまじ

あり仕へしやふふくらのを猜と忽地一家の親を忘る。  
 遂に讒言し七かのと搗おとけりぬ。俄頃小富士を止りて  
 浅間を召まける。知親本意をさしりて推て冬内を  
 とも。當時天下の伶人の浅間をよまざる者あつた。されば古歌の  
 信濃の浅間の嶽も燃るといふを  
 富士の煙のうひやまららん  
 と詠するぞや。富士ハ用さるのりとして御内へも入らぬ。  
 知親更におもなくて。世より家引籠りて世の交交を  
 せざりしやふ。浅間のまましく威勢をば勅命と偽て富  
 士が家のけりし。高峯と号し大鼓をも奪ひしとの和親

いよ安らざるども。虎狼路の横らるる六千万無量の憤を合  
 るがら。詠るふらひなくして只憂とのまおひひをそり久しく病て  
 世を去けき。終ぬ家もおとろへ果らう。その頃知親が一子をれが  
 為ぬ父きりける。富士右近有知の年ひと少りり。母ともみ故  
 郷と立去り本国をまへこの駿河国に來てそらり耕し母を  
 養ひりも。音律の心と委ね天性そのみの賢うりしが薄命ぬ  
 ちて時をぬき。齡七十ぬいて身まうりひひ。まへ家樂譜の  
 秘書と相傳し。今も難苦の世を經きとも。その伎を廢せ父  
 祖及ぶへくもあらねど。そまがも又知きより音律を學び  
 ひひと一五一十とやせし。く義満公聞食てさればと平人の

ゆらぎりけ。富士がゆり豫てまろし食とらるり。まろし徐村  
 落ぬ人ともまへ學ぶとゆどもその伎のとあつらる。今日船  
 中の舞樂ぬゆりて大鼓つらまうらる。まろし徐村がせし。  
 照蔭が孫淺間左衛門照行とのゆらり。まろし徐村がせし。  
 のと問せらるへ。舞樂の古實覺悟ぬる。委細ぬ答へ  
 せると命ける。その時淺間の富士が飽まを。祖父を誹謗  
 まろし受てふく憤つ。命のゆと。まろし徐村がせし。  
 たふとの嚴命を稟て歡ひぬ堪む。徐村の船ぬまら出富  
 士右門の對ひてゆま。其許が先祖の拙りしを覆んと。  
 のりさぬぬのぬら。照蔭が孫淺間左衛門照行の

いと傍のこころおのひるがら序のけきを鉗つるふ幸の問答  
 まるるを許しぬばとふ鬱胸をたふさす人只その腹を  
 刃でその背を刃ぎとりのども多しその背のゆるみよぶあれ其許  
 論ハそまゆも粗語一腹のこを刃で背のゆるをたふさすの  
 むろー右京進知親の時まも能藝拙くて晴の舞樂の  
 召まもあつるを況二代三代田夫とあつて笛ハ草薙童の  
 吹のとおりの大鼓ハ早乙女ハ亭午をあらまの暗號との  
 繫えつらんぬ多しその伎ハ賢多しとまろハ彼蚊蚋の山と  
 負ハ蠶螂の車を駐るふひと身の程むとまろづるふゆ  
 ちや又五音の變トるをりて其許が彼首ぬく居しを

志のわつが音律ハ妙なる證るまハ既ハ雲泥の差別あるハ  
 君ハ知し召るべけき御心の廣きこと此海の如くして  
 無禮の罪よば咎らふを却て舞樂のゆるを問せること  
 大なる幸なるまといこむりゆみひりける浅間ハ今茲ハ五歳  
 身丈五尺六寸ありて全體雪のごく白きハ頬髭青く生て  
 衣服も綺羅やふ装ひハ富士ハ又年紀四十を過て身の丈も  
 一歳低く垢つきたる針目衣の裾ハ海松のごくうさたれしを  
 被ぬまハそのさるま立るひびて花のうさつる深山木さる  
 彼富士とやらん据るま問答していす罪をまもべき命助  
 こしを幸福めしてまろいねくおのひ人もあつりけ





御遊の船中  
富士淺間  
舞樂を  
論ぞ



右門ハ羞ムル氣色モ多ク浅ルガハ野ヲ熱燂テ其身音  
律ノ乱ミシセリセリ。彼處ハ在ヲ有リ。自誇シ之  
也。其ノ自然ノ道理アリ。竊聽リノ音律ヲ有ルハ五  
音モ又乱ルベシ。夫樂ハ天地四時風雨ヲ象リテ金石絳竹  
匏土革木ノ八音宮商角徵羽ノ五聲ヲ備フ樂ハ樂ニ  
君子ハ其ノ道ヲ得んことを樂ミ小人ハ其ノ欲ヲ得んことを  
樂ビ又音ハ飲ウ剛柔清濁和ギテ相諧フとリ。宮亂ミテ則荒バ其ノ君驕リ商亂ミテ則跛ハ其ノ臣壞レ角  
亂ミテ則憂ミ其ノ民怨徵亂ミテ則哀ハ其ノ吏勤羽亂ミテ

則危ケル。財匱ル五ノ者皆乱ミテ送ハ陵ハこれ慢ニ  
シ。國ノ興敗ヲ有リ。理ノ有リ。野あり。妙處ハ至  
カ。五音ノ變ゼシセリ。人あり。知。聊  
人モ俄ニ耳ヲ歌ゲ。彼ハ形中似ズ。樂ノこと細ク  
けり。浅間ハ富士ダマケトナす。消んとする。天  
怒ヲ護。縦火ハ水ハ消んとする。天  
王寺ノ伶人ハ。圖ヲ調。物ノ音。詠  
世ハ揭焉。故。太子ノ御時ノ圖今ハ

所謂六時堂の前の鐘かねひいてその声こゑ黄鐘調わうしゆてうの最中さいちゆうより  
寒暑かんしよのよよくてあつさうとあつせりて二月にがつ涅槃會ねはんかいより  
廿二日にじふににち聖せい天會てんかいまきの中間ちゆうかんを指南しゆなんとと秘藏ひさうの正せい加か之し  
家けのの加か樓ろう頻ひんの秘曲ひききくを傳受でんじゆををりりくくるるひひああるるままと  
りりをを右門うもん含咲やんざいててげげひひくくささるるひひああるるべべいいままるるままとと本朝ほんてうの  
樂がくへへ神樂しんがくをを權輿けんいとと祇園精舎ぎえんしやうがやの鐘かねはは是無常院ぜむじやういんのの  
ままるるままとと秘藏ひさうししるるままるる加か樓ろう頻ひんへへ沙陀調さだてうの曲きよくひひてて原天  
竺てんてくの樂がくひひけけるるままとと加樓頻かろうひんへへ梵語ぼんごひひてて鳥とりの名なるる漢土わんこ  
ままとと教鳥きやうちゆうととりりままるる鳴声めいしやう苦空くくう無我常樂むがじやうがく我淨わじやうの義ぎ  
ままとと妙音めういん天淨てんじやう南竺なんてく國こくのの舞まいをを傳でんふふ僧正そうじやう尼にててままとと受じゆ

傳でんししののまま唐山たうざんの留りゆうとと先本朝せんほんてうの來きてて傳でんへへるるりりてて神  
國こくの古實こじつひひままるる日ひの神天しんてんの石磐いしばんひひ入いりりてて般若ぼんじやく戸こをを閉して  
幽居ゆうきままるるままとと八百萬やせまひやくまんの神しんらら天安河邊てんあんがへんの會かい合ごうてて舞樂ぶがくを  
奏そうししるるひひままるる起おこままるる天竺佛國てんてくぶつこくの樂がく諸行無常しよぎやうむじやうの調てうとと本  
意いととせせるるままとと家けのの樂器がくきの中ちゆう大鼓たいことと弟一ていいつととままるる此  
謂いふふととりりままるる照行てうぎやう磯いそととゆゆききつつままるるりりがが又また声こゑををりり立たててりり  
ままるる大鼓たいこののひひままるる家けのの伎ぎをを究きゆうてて他たのの讓じやうととままるるりりままるる其  
ひひままるる實じつととままるる右門うもんのの大鼓たいこ一いつ名なととままるる和名鈔わなうしやうの  
叢そうとと於保豆おほまめ美又四乃豆みまたしよのまめ美みとと訓くんをを申樂行まうがくぎやうととままるる細  
腰鼓こしこのの大鼓たいこ小鼓せうこの名なををりりてて後世こうせいののままるるてて大鼓たいこととりりままるる大

鼓の抱り抱ハ和名の豆ノ美乃波知と訓を戦世の事  
 拍て兵を進り靖治と云ふは拍て時をさすその外獨鼓  
 鞀鼓腰鼓ホの數種あり鼓ハ春分の音萬物皆鼓甲して  
 出づ萬物の發生を助るをいつての故の鼓といふなり  
 鞀人鼓を冒るふくろを啓蟄の日を以てさるる雷の声を鼓を  
 象たり。純陽の樂器なり。道家を第一の傳受とす。  
 秘説多しといふも陽春白雪の言ハ下俚巴人の為の説て益  
 とのふ照行向毎の論破せし古戦已の敗績して口を閉こと  
 のこと布鼓を鳴らして雷門をさるる異なり。義満公を  
 たり奉り船中の人々噫と感ざる声洋々として耳の満り義

満公ふらび命けり。東の遊び富士を眺めて富  
 士を得。今天下新の治りぬ。賤技のものと云ふも藝の  
 其招く折るふ。まいて樂ハ六藝のその一ツ。民の心を善  
 ぬ。その人を感ぜしむるのいと深きものなり。さるる風を移し俗を  
 易る。樂より善なる。ける堪能の人をさるる村落の埋  
 かく。餘のなき上洛せし。あつて浅間の命せて彼大鼓をも返  
 與へ父祖の本領相違なく下賜すべし。且富士と浅間と六原  
 一家の親ありといふ。曩の泰範が浅間を富士の一名なりと  
 といふもよく稱す。あつて五の遺恨を存せし。御帰  
 浴もあつた。此度の供奉及ぶ。族の用

意<sup>がま</sup>るど<sup>を</sup>ら<sup>の</sup>一<sup>を</sup>果<sup>を</sup>て<sup>を</sup>後<sup>を</sup>走<sup>を</sup>来<sup>を</sup>る<sup>を</sup>家<sup>を</sup>の<sup>を</sup>舊<sup>を</sup>記<sup>を</sup>す<sup>を</sup>御<sup>を</sup>覽<sup>を</sup>の<sup>を</sup>備<sup>を</sup>奉<sup>を</sup>べ<sup>を</sup>と。  
怨<sup>を</sup>み<sup>を</sup>命<sup>を</sup>下<sup>を</sup>さ<sup>を</sup>遣<sup>を</sup>け<sup>を</sup>れ<sup>を</sup>ば<sup>を</sup>右<sup>を</sup>門<sup>を</sup>の<sup>を</sup>恩<sup>を</sup>命<sup>を</sup>の<sup>を</sup>為<sup>を</sup>の<sup>を</sup>餘<sup>を</sup>り<sup>を</sup>く<sup>を</sup>一<sup>を</sup>時<sup>を</sup>の<sup>を</sup>面<sup>を</sup>目<sup>を</sup>せ<sup>を</sup>。  
施<sup>を</sup>し<sup>を</sup>く<sup>を</sup>元<sup>を</sup>の<sup>を</sup>岸<sup>を</sup>邊<sup>を</sup>の<sup>を</sup>送<sup>を</sup>ら<sup>を</sup>ま<sup>を</sup>て<sup>を</sup>女<sup>を</sup>を<sup>を</sup>船<sup>を</sup>より<sup>を</sup>渡<sup>を</sup>登<sup>を</sup>り<sup>を</sup>お<sup>を</sup>の<sup>を</sup>が<sup>を</sup>家<sup>を</sup>路<sup>を</sup>の<sup>を</sup>  
く<sup>を</sup>う<sup>を</sup>け<sup>を</sup>る<sup>を</sup>心<sup>を</sup>の<sup>を</sup>うち<sup>を</sup>の<sup>を</sup>う<sup>を</sup>ら<sup>を</sup>ま<sup>を</sup>し<sup>を</sup>く<sup>を</sup>う<sup>を</sup>け<sup>を</sup>ん<sup>を</sup>う<sup>を</sup>し<sup>を</sup>。

中巻

高木與曾之

三国一夜物語卷之一了

